

延慶本平家物語における「燈台鬼説話」

浜 畑 圭 吾

はじめに

延慶本『平家物語』第一末廿五「迦留大臣之事」は、所謂「燈台鬼説話」と呼ばれるものであり、延慶本・長門本・『源平盛衰記』（以下『盛衰記』）に見られる。本稿では、延慶本がこの燈台鬼説話を鹿ヶ谷事件で流罪となった成親成経父子物語の例話としているのに対して、長門本と『盛衰記』では、俊寛有王主従物語の例話としているという配置の違いについて論じてみたい。先行研究としては先ず、『宝物集』中の同文記事との関係について、高橋俊夫氏の^①、『宝物集』と平家物語の間には依拠関係はなく、同源・兄弟関係であり、『宝物集』の九冊本と光長寺本が延慶本に近いとする論がある。また水原一氏は、延慶本では父子の情の

物語、長門本・『盛衰記』では異境の流人を尋ね当てるという意味づけがあるとされ、山下宏明氏はこの配置の違いについて、延慶本の配置は本話と例話の間に「ねじれ」があるとされている。そして今井正之助氏は高橋俊夫氏が使用されなかった『宝物集』久遠寺本（以下久遠寺本）を挙げてその親近性を述べられ、完全にはその依拠関係を実証できないが、殆どの部分で一致するので、結局は『宝物集』のある古本に行き着くのではないかとされている。また山下哲郎氏は、依拠関係については触れておられないが、この説話は平家物語において、長門本・『盛衰記』のような俊寛説話の例証としての方が意味を持つとされており、高橋貞一氏もこの説を支持しておられる。また、河原木有二氏は、平家物語にあるような燈台鬼説話は『宝物集』が初見であるとされており、近年では山田昭全氏が、^⑧『宝物集』

の一巻本・二巻本・三巻本には見られない迦留大臣の迦留寺建立説を七巻本が持つており、延慶本も同様にそれを持つていることから、延慶本は七巻本から燈台鬼説話を引用したとされ、さらに河原木氏と同様にこの説話は『宝物集』が初見であるとされている。

こうした先学の研究を踏まえて本稿では、『平家物語』諸本の中、延慶本、長門本、『盛衰記』三本が燈台鬼説話をそれぞれどう配置しているのかを改めて捉えなおしてみたい。

一 『平家物語』と諸文献の比較

延慶本⁹では、鹿ヶ谷事件の発覚によって流罪と決まった藤原成経が、妻子と別離の悲しみに暮れた後にこの説話が続けている。

昔迦留大臣ト申ス人ヲハシキ。遣唐使ニシテ、異国ニ渡テ御ウシケルヲ、何ナル事力有ケン、物イハヌ薬ヲクハセテ、五躰ニ絵ヲ書テ、額ニ燈ガヒヲ打テ、燈台鬼ト名テ、火ヲトモス由聞ケレバ、其御子ニ弼宰相ト申ス人、万里ノ波ヲ凌ギ、他州ノ雲ヲ尋テ見給ケレバ、燈鬼涙ヲ流シテ、手ノ指ヲ食切テ、カクゾ書給ケル。

我是日本花京客 汝即同姓一宅人
為父為子前世契 隔山隔海恋情辛^{ネンゴロナリ}
經年流淚蓬蒿宿 遂日馳思蘭菊親
形破他州成燈鬼 争帰旧里棄斯身

ト書タリ。是ヲ見給ケム宰相ノ心中何計ナリケム。遂ニ御門ニ申請テ帰朝シテ、其悦ニ大和国迦留寺ヲ建立スト見タリ。彼ハ父ヲ助ツレバ孝養ノ第一也。是ハ其詮モナケレドモ、親子ノ中ノ哀サハ、只大納言ノ事ヲノミ悲テ、アケクレ泣アカシ給ケリ。

「迦留大臣」が遣唐使となり、大陸へ渡ったところ燈台鬼にされ、息子弼宰相が尋ねて来て再会する、という大筋は三本とも一致している。燈台鬼説話が様々な文献に見られるということは既に先学の研究によって指摘されているところであるが、先ず、延慶本の燈台鬼説話と諸文献のそれとを比較してみたい。

燈台鬼説話の最も早い例として『和歌色葉¹⁰』に次のような記述がある。

六かわつなくゐてのやまふきさきにけりあはましものを花のさかりに
かわつとは上にいへり。ゐてのやまふきとは或書云、

昔橘大臣諸兄ゐて寺をつくりて、金堂の四面の廻廊のめくりに款冬をうへて、廊のうらに水を湛て花さかせて水にうつしてみるへきやうをかまへたりけるに、寺供養日おもはさるに讒言を、ひて、みまかりにければ、やまふきの花を水にうつしてみる事もなくてやみにけることをよめる也云々。或人云輕大臣玉井の光明寺をつくりてやまふきをうへたりけるにその堂を丙寅の日供養したりける故に唐土にわたりたりけるか、燈臺鬼につくられたりけるかといひつたへたり。諸兄とはきゝをよはすと云々。

『古今和歌集』一二五番歌「かはつなく」の注であり、橘諸兄が井手寺に山吹を植えたことを詠んだものだと伝えてゐる。そこで「或人云」として、山吹は「輕大臣」が「玉井の光明寺」に植えたのであり、諸兄ではないのではないかという異伝も記している。この「或人云」として記された異伝は他の古今集の古注釈書でいくつか確認することができる。先ず、鎌倉末期から南北朝期にかけての成立とされる、『毘沙門堂本古今集注^①』には、

山フキハアヤナ、サキシハナミトウヘケル君カコヨ
ヒコナクニ

延慶本平家物語における「燈台鬼説話」

注アヤナ、サキシト云ハ無益ニナサキシト云也。此歌ハ右大臣橘諸兄ノ山城国井出寺ヲ建立シテ款冬ヲ栽タリ。仍井出ノ大臣トハ此人事也。内大臣高向迦留^{タカムコノ}同国ニ光明山寺ヲ造テ、仍井出寺ノ款冬ヲウツシテノチ、諸兄ノ許ヘ見ニオハセヨト、云ヤリタリケレハ、今夜ユカムトシテコサリケルニヨメル也。迦留ノ大臣ノ哥也。コナクト云ハコヌニト云心也。

とある。これは一二五番歌ではなく、一二三番歌に対する注であるが、光明山寺を造り、井出寺の款冬を移し植えた「高向迦留」が橘諸兄を招いたが、来ることができなかったとしている。そして、室町期成立、天理図書館蔵『古今集延五記^②』にも次のような注がある。

一あやな、さきそ

無益ニナサキシト也此哥ハ諸兄大臣ノ哥也山城ノ井手寺^{ヤク}_{光明寺}此寺ヲ建テ山水ニ山フキヲウヘタリ其時高向ノ迦留^{モコエノ}_{カルノ}大臣此山フキヲ来テ見ント約束シテ不^{セン}来時ニヨメリ今ノ井手ノ玉水其故跡也

編者である堯恵は、二条家流を引き継いだ堯孝の弟子である。『毘沙門堂本古今集注』では、招かれたのは、橘諸兄であったが、ここでは迦留大臣となっている。このように、

一二三番歌と一二五番歌にほぼ同じ事を記した注があり、それが錯綜している様が確認できる。両書とも、『和歌色葉』のように、「燈台鬼につくられたりけるか」とはしていないものの、全く別の伝承というわけではなく、相違点の多い類話ということになるだろう。

そして『和歌色葉』より具体的でまとまったものが、『宝物集』に見られる。延慶本の当該説話が、『宝物集』の燈台鬼説話に、依拠したものであるということは既に指摘されているが、『宝物集』本文を挙げると次のようになる⁽¹³⁾。

輕大臣と申ける人、遣唐使にて渡りて侍りけるを、如何成事か有けん、物いはぬ藥をくはせて、身には絵を書、頭には燈台と云物をうちて、火をともして、燈台鬼と云名を付て有と云事を聞て、其子弼宰相と云人、万里の波を分て、他州震旦国まで尋行て見たまひければ、鬼泪をながして、手の指をくひ切て血を出してかくぞ書給ひける。

我是日本花京客 汝即同姓一宅人
為父為子前世契 隔山隔国恋情辛
経年流涙蓬蒿宿 逐日馳思蘭菊親
形破他州成燈鬼 争帰旧里寄斯身

是を見給ひけん子の御心、いかばかり覚え給ひけん。さて、唐の御門にこひとりて、日本国へぐして帰り給へりとぞ申ためり。子ならざらむ人、他州震旦まで行人侍りなんや。

此事日本紀以下諸家の日記にみえず。さ程の人、名をしるさず。無不審にあらず。遣唐使の唐にとまるは、清河の宰相・安倍の仲麻呂等也。但大和国に輕寺と云所あり。彼大臣帰朝の後建立といへり。能々定説を可尋也。

ここでは吉川本を挙げた。延慶本とほぼ同内容であり、表現も似通っている。延慶本が『宝物集』に依拠しているとする説を首肯するものであるが、次章において『宝物集』諸本との関わりをもう少し詳しく述べたい。そして次の鎌倉末期から室町初期成立とされる『五常内義抄⁽¹⁴⁾』には、『和歌色葉』とは違う燈台鬼説話が見られる。

文集云、道州ノヒキ人ヲ燈臺鬼トナサレテ、毎年国ノ季貢ニヲ、ヤケヘマイルナラヒ也、然ル間、生ナカラ親ニヲクレ、子ニ別レテ、悲ム事極ナシ、爰ニ揚成申人(彼)国ノ守ト成テ後、此事ヲ悲テ、大宅ヘ歎奉テ、宣旨ヲ申下テ、燈臺鬼ヲ留ラレヌ、道州ノ民、老タル

モ若モ喜事無^レ限、人トナレル事ヲエタリ、彼国ノ村民子孫ノ末ニ至ルマテ、若揚成ノ恩ヲワスレヤセンスラン、是ヲワスレサランカタメニ、人毎^{コト}ニウメル子ニ、皆揚ノ字ヲ片名ニ付テ、揚成ノ恩ヲワスレジトタシナミケリ、恩ヲ^マ恩タルヲ重クスル事如此、^彼披国ノ人ノ哥ニ云ク

君コスハヲヤニモ子^コニモ別路^{ワカレチ}ウカリシヤミニ猶^ナマヨハ
マシ

冒頭に「文集云」とある通り、これは『白氏文集』卷三「道州民」を基にしたものである。これについて山下哲郎氏の、外面的な類似点はないが、『宝物集』燈台鬼説話と潜在的な関連があるのではないか、というご指摘は納得のいくものである。つまり、そうした連想をされる程、燈台鬼説話は「親と子の物語」として広く認知されていたということなのである。

十四世紀に入ると、『帝王編年記』⁽¹⁶⁾のような歴史書にも燈台鬼説話が引かれてくる。

今年。遣唐使高向玄利為^二燈臺鬼^一。詩云。

吾斯日本兩京賓

汝亦東城一宅人

謂^{謂其子玄衡}其子玄衡
為^レ子為^レ親前世契

一離一會此生因

延慶本平家物語における「燈台鬼説話」

經^レ年落^レ淚蓬蒿宿 送^レ日馳^レ思旦暮新
形破^二他州^一為^二燈鬼^一 爭^レ歸^二故里^一捨^二茲身^一

これは卷九齊明天皇六年の記事である。迦留大臣が「高向玄利」とされているが、『宝物集』『平家物語』の簡略化された形となっている。そして、文安元年（一四四四年）成立とされる古辞書『下学集』⁽¹⁷⁾にも「輕大臣」として項目が立てられている。『下学集』の本文は、『宝物集』『平家物語』とほぼ同文であり、その影響が考えられるが、古辞書にこうした形で載っているということは、燈台鬼説話がある程度世間に認知されていたことを示している。また、神代から永享八年（一四三六）までの年代記である『東寺王代記』⁽¹⁸⁾も、

或記云。推古天皇御代。迦留大臣遣唐使二渡ケルカ。
燈臺鬼ニナサル。其後皇極女帝御代。迦留大臣ノ息彌
宰相入唐園碁ト云々。

と、簡略化した燈台鬼説話を引いている。

このように、中世における燈台鬼説話を確認すると、延慶本は、やはり『宝物集』に依拠したものであるということになるだろう。そして同時に、燈台鬼説話が様々な分野で広く浸透していたことも確認できるのである。そうした

ことを裏付けるかと思われる、興味深い資料を挙げたい。

綿百量、願主大法師聖勝生年五十一、

建保三卯月廿六日法橋康辨作(花押)

これは、興福寺西金堂に納められている龍燈鬼像の胎内から発見された銘である。¹⁹⁾「大法師聖勝」という僧の願によって、建保三年(一二一五年)に運慶の三男康辨が造像したことがわかる。この像は、治承四年の南都焼討によって焼失した興福寺再建の一環として納められたものだと考えられるが、この像と一對とされる天燈鬼像とをあわせた解説として、『奈良六大寺大観』²⁰⁾では、

仏前に燈を捧げる鬼形という構想がこの時の創意にかかるものかどうかは明らかでなく、類品は残っていない。中国には古く「燭奴」「燈婢」といって、木彫の童形、女形に燈を持たせた燭台があったといい(『開元天寶遺事』)、この女形を鬼形に替えたものが古代寺院になかったとはいえない。

としている。しかしこれは、仏前に燈を捧げる鬼形という構想についてであり、古い中国の例も「燈」を「持たせた」例であり、龍燈鬼像のように頭に載せたというものではない。仏前に燈を捧げるという構想は古くからあり、それが

天燈鬼像のように、燈を「持たせる」という形となったのであると考えられるが、龍燈鬼像の様な「頭に載せる」という構想とは別である。つまり、この像の制作者康辨は、像を造る際にその想像力、構想力をかきたてるような「情報」に接していたと考えられる。龍燈鬼像造立以前に成立し、龍燈鬼像と酷似した描写を持つ『宝物集』はその「情報」の一つではなかっただろうか。『宝物集』が唱導者の教義解説のための例話集として使用されていたということもそれを裏付けるものである。

即ち、延慶本は、そうした「情報」が広く流布し、像として造られるような状況の中で、『宝物集』とほぼ同文にこの説話を取り入れたということになるのである。しかし、『平家物語』においても、長門本・『盛衰記』は延慶本とは異なる姿勢でこの説話を取り入れている。そこで、次に『平家物語』諸本間の相違を、『宝物集』を手がかりに考えてみたい。

二 『平家物語』と『宝物集』の比較

『平家物語』三本の燈台鬼説話を考えるにあたって、それに最も近い本文を持つとされる『宝物集』と比較したい。それは、延慶本と長門本・『盛衰記』の、位置の相違が本文にも影響を及ぼしていることを確認するためである。『宝物集』は多くの伝本があるが、ここでは一卷本、二巻本、三巻本、吉田本、吉川本、光長寺本、久遠寺本の七本を使用する。⁽²¹⁾

先ず注目すべきは、長門本のみが迦留大臣が唐へ渡った時を「推古天皇の御宇」とし、息子の弼宰相が渡唐した時を、「皇極天皇の御時」とする点である。第三十三代推古天皇天皇の在位は、五九二年から六二八年であり、第三十五代皇極天皇の在位は、六四二年から六四五年である。つまり、六世紀後半から七世紀中頃に設定されているわけだが、こうした独自の時代設定を解く手がかりとして、久遠寺本が本文の「カルノ大臣」に、「高向玄理^{タカワノハルマサ}」という左傍注⁽²²⁾を施している点に注目したい。これは他の伝本には見られない。高向玄理は七世紀中頃に活躍した学者、官人であり、『日本

書紀』推古天皇十六年九月の記事に、唐へ渡ったことが記されており、孝徳天皇白雉五年にも再度渡唐し、⁽²³⁾ 原地で没したことがわかつてゐる。つまり、長門本の設定と同じ時代の人物が、久遠寺本では同一人物とされているのである。なぜこうしたことが起きているのだろうか。結論から先に述べるならば、迦留大臣を高向玄理に比定する説があり、長門本の「推古天皇の御宇」「皇極天皇の御時」という時代設定はそれと同様のことを示しているのである。つまり、長門本と久遠寺本の両記事は、共通の基盤から発生したものであるということになり、前章で挙げた『毘沙門堂古今集注』が、「高向迦留」、「古今集延五記」が、「高向ノ迦留ノ大臣」としているのも、そうしたことを裏付けていると考えられる。そして、これも既に確認したが、『帝王編年記』が「遣唐使高向玄利為灯臺鬼」として、これを皇極天皇が重祚した斉明天皇の六年の記事としてゐることも、そうしたことを示すものだろう。また、『東寺王代記』も「推古天皇御代」「皇極女帝御代」としてあり、高向玄理迦留大臣比定説の流入が考えられる。延慶本燈台鬼説話に、迦留大臣を高向玄理とする説が流入したのが長門本であり、独自の時代設定はそうしたことを示しているのである。⁽²⁴⁾

長門本の独自設定は、燈台鬼にされた理由にも現れている。延慶本は「何ナル事力有ケン」として、その理由を不明としており、『宝物集』諸本も同様である。『盛衰記』も特に記していないが、長門本は、

遣唐使にわたりて、おんやう道をならひ、ゑんていをつくし、奥儀をきはめて、帰朝せんとせし時、おんやうのゑんけん、日域へわたさん事をおしみて、

として、陰陽道の奥儀が日本へ渡ることを恐れたため、となっている。何らかの伝承と関わりがあると考えられるが、長門本の特異な設定であると言えるだろう。

そして更に、燈台鬼の描写にも、語句レベルの相違が見られる。大臣は後に、弼宰相と会った際、詩を示すが、それは「物イハヌ葉」を飲まされ、口がきけなくなったからであり、延慶本、『盛衰記』、『宝物集』諸本はこれを記すが、長門本は記していない。また、燈台鬼に火が点されたことを、延慶本は「火ヲトモス由聞ケレバ」としているが、『宝物集』一卷本、『盛衰記』、長門本は記していない。そして、燈台鬼は「手ノ指ヲ食切テ」詩を書くのだが、この表現は長門本には見られない。このように、長門本は語句のレベルでも、延慶本と著しく異なっており、特異と言わざるを

えない。また、次に燈台鬼が示した詩についてであるが、ここでも長門本と延慶本は異なっている。

【延慶本】

我是日本花京客

汝即同姓一宅人

為父為子前世契

隔山隔海恋情辛

經年流淚蓬蒿宿

遂日馳思蘭菊親

形破他州成燈鬼

爭歸旧里棄斯身

【長門本】

吾是日本花京客

汝則同姓一宅人

成祖成子前世契

隔山隔海慕情辛

經年落淚蓬蒿宿

累月馳思蘭菊親

形壞他州成燭鬼

何還旧里捨此身

相違する箇所を四角で囲った。『盛衰記』にはこれほどの相違点は見られない。詩そのものの意味は殆ど変わっていないが、ここで表記された文字に注目すると、次に示す光長寺本『宝物集』（以下光長寺本）の本文が長門本に近似している。

吾是日本華京客

汝復同姓一宅人

成祖成子前世契

隔山隔海慕情苦

經^テ年^{ナガシ}落^レ涙^ス宿^{ホウ}蓬^ウ蒿^ニ
 累^{カサネ}月^ラ馳^シ思^{ラシム}親^ニ蘭^ニ菊^ニ
 形^{シテ}壞^{カテ}他^ニ州^ニ成^ニ燈^ニ鬼^ト
 何^ニ還^ニ旧^ニ里^ニ捨^ニ此^ニ身^ニ

光長寺本も延慶本との相違点を四角で囲むと、異同が多い。他の『宝物集』諸本は殆ど延慶本と変わらないが、光長寺本のみ著しい相違を見せている。そして、長門本と光長寺本とを比べてみると、その相違点が近いことがわかる。具体的に示すと、他本全てが「為父為子前世契」とするところをこの二本のみが、「成祖成子前世契」とする点、そしてこれも他本の全てが涙「流」すのに対してこの二本は、「落」としているのである。また、延慶本で「遂日」思いを馳せるとするところを長門本・光長寺本では、「累月」で思いを馳すとしており、「争帰旧里棄斯身」を「何還旧里捨此身」とするものも、長門本と光長寺本のみである。勿論、一致点が見られるというだけで、長門本と光長寺本との間に直接関係があると断じることとはできない。しかし、これだけ延慶本との相違箇所が一致する二文献が存在するということは、他にこのような詩を持つ燈台鬼説話が存在し、長門本も光長寺本もその流れを汲むものではないか、

と考えることは出来るであろう。つまり、長門本は、延慶本以外の文献、もしくは燈台鬼説話を参考にしてこの説話を記した可能性があり、長門本の編著者に、延慶本のような燈台鬼説話をそのまま引き写しにするつもりはなかったことがわかる。

最後に説話の結末部について考えてみたい。延慶本が、是ヲ見給ケム宰相ノ心中何計ナリケム。遂ニ御門ニ申請テ帰朝シテ、其悦ニ大和国迦留寺ヲ建立スト見タリ。彼ハ父ヲ助ツレバ孝養ノ第一也。是ハ其詮モナケレドモ、親子ノ中ノ哀サハ、只大納言ノ事ヲノミ悲テ、アケクレ泣アカシ給ケリ。

として、その後日譚を語り、成親成経父子に関連づけているのに対して、長門本は、

宰相、是を見てこそ、我父、かるの大臣とは、しり給しか。俊寛か主従こそ、かの弼の宰相の、父子にちはさりける物をや。「これは、あり王丸か」との給ふにこそ、しゆんくはん僧都とは、しられける。かれは、万里の波濤をしのきて、たうとまでわたり、これは、千里の山川をわけて、いわうか嶋へ、たつねけり。むかしいまは、ことなれとも、徳をしやする志、これお

なし。父子主従は、かはりたれ共、恩をほうする心は、一なり。

としており、延慶本のような後日譚はなく、俊寛と有王になぞらえる、独特の記事となつてゐる。『盛衰記』では、「宰相ハ我父ノ輕大臣共知ケレ。」という簡潔な一文を記すのみである。

先ずここで注目したい点は、延慶本がこの説話を「孝養ノ第一也」としてゐるところである。『宝物集』では一卷本以外の伝本に、子供でもなければ、はるばると海を渡つて行くだろうか、といった本文があり、延慶本と同様、「孝養」の説話であることがわかる。また、『宝物集』における燈台鬼説話は、何が宝かという問答の中で、「子が宝である」とする一連の説話の中にあり、その前後に「孝養」の説話が配されてゐることからも、そうしたモチーフの説話であると考えられる。延慶本がこの説話を「孝養」とする点において、やはり『宝物集』と近い関係にあると言えるだろう。そして次に、迦留寺建立説についてだが、これは、長門本や『盛衰記』には見られない。延慶本と『宝物集』のみ一致する記事であるが、『宝物集』では、吉田本、吉川本、光長寺本、久遠寺本に見られるものである。ここで興味深

いのは、『宝物集』の吉田本、吉川本、久遠寺本が「能々定説ヲ尋ヌベキ也」とし、光長寺本が「不審」として懷疑的だが、延慶本では「見タリ」として『宝物集』より積極的に取り入れている点である。迦留寺が実際に大和国に存在した古代寺院であることは、『日本書紀』⁽²⁵⁾によつて確認することができる。中世には既に廃寺となつていたようであるが、この建立説については、平家物語のもうひとつの迦留大臣記事から考えてみたい。延慶本で示すと次の箇所である。

廿一日、摂政ヲ止奉リテ、松殿ノ御子、大納言師家トテ十三ニ成給ケルヲ、内大臣ニ成シ奉テ、ヤガテ摂政ノ詔書ヲ下サル。折節大臣アカザリケレバ、後徳大寺ノ左大臣実定、内大臣ニテオワシケルヲ、暫ク借テ成リ給タリケレバ、「昔ハカルノ大臣ト云人アリキ。是ヲバカル、大臣ト云ベシ」トゾ、時人申ケル。カヤウノ事ヲバ大宮大相国伊通コソ宣シニ、其人ヲハセネドモ、申人モアリケルニヤ。

これは、第四・廿九「松殿御子師家摂政ニ成シ給事」に見られる記事で、木曾義仲と手を結んだ藤原基房が、我が子師家を摂政とするために、当時欠員のなかつた大臣を後

徳大寺実定より借りたのであるが、そのことを「時人」が、「カルノ大臣」と「カル、大臣」をかけて、皮肉った場面である。諸本では、長門本、『盛衰記』、南都本が同様のことを記しているが、語り系諸本にはその記述がない。この事件については、『愚管抄』⁽²⁶⁾も「又大臣ノ闕モナキニ實定ノ内大臣ヲ暫トテカリテナシタレバ、世ニハカルノ大臣ト云異名又ツケテケリ。」としている。また、『玉葉』⁽²⁷⁾では寿永二年十一月二十三日条に「内大臣解官に非ず、借用云々」「借官之始め」としており、官を借りるという先例のなかったことが確認できる。さらに『百鍊抄』⁽²⁸⁾第九にも同様の記述が見られ、『吉記』⁽²⁹⁾では、「大臣借用未だ此の例を聞かず」「乱世の政、驚くべき事歟、」とやや強い調子で「前殿下」基房を非難している。

このように、師家借官事件は、前代未聞の椿事であり、『吉記』が記す通り、「乱世の政」であったわけだが、注目したいのは、延慶本が「カル、大臣」という皮肉を、既に故人である「大宮ノ大相国伊通」が言いそうなことだ、と言った人があったとしている点である。何故、ここで藤原伊通の名が挙がってくるのだろうか。伊通は『平家物語』において、いくつか名前の出てくる人物であるが、その人と

なりを示すものはない。そこで、他文献を確認してみると、『平治物語』上「信西の子息尋ねらるる事付けたり除目の事並びに悪源太上洛の事」に次のような話がある。⁽³⁰⁾

太政大臣伊通公其比左大将にておはしけるが、才学優長にして、御前にても常におかしき事を申されければ、君も臣も大にわらはせ給ひ、御遊もさむるほど也。

「内裏にこそ武士共のし出したる事もなくて、官加階を成るなれ。人をおほく殺たる計にてくわんかかひをならんには、三でう殿の井こそ人をおほく殺たれ。な」と其井は官は成ぬ。」と咲ける。

これは、平治の乱を起こした藤原信頼が、味方についた公家や武士に、官職を与えたことについての言葉である。そこで伊通は、人を多く殺すことで官職が貰えるのならば、戦闘で多くの人が飛び込んだ三条殿の井戸こそが、官職を貰うべきだろうと皮肉っている。更に物語は伊通を、「才学優長にして、御前にても常におかしき事を申されければ、君も臣も大にわらはせ給ひ、御遊もさむるほど也。」としている。つまり、皮肉屋的な性格であったということであり、延慶本の記述と共通するものがある。

また、『古今著聞集』⁽³¹⁾には、同僚四人が中納言に昇進した

にもかかわらず、自分だけが留められたことに腹を立て、全ての官職を返上し、檳榔毛の車を大宮面で打ち壊したという話があり、気性の激しい人であったこともうかがえる⁽³²⁾。この話は有名であつたらしく、『十訓抄』や『古事談』『今鏡』にも引かれている。

そうすると、先例のない、異常事態であつた師家借官事件を皮肉る材料として、迦留大臣が引かれ、さらにそれを気性の激しい、皮肉屋としてよく知られている伊通が言いそうなことであるとする設定は、『平家物語』がこれを、人々が納得する、よく知られているものとして扱っているということを示しているのではないだろうか。そのことはまた、燈台鬼説話が広く世上に流布していたということをも示しているのである。

このように、『平家物語』は燈台鬼説話を別の記事でも取り入れている。こうした積極的な姿勢は、延慶本の、迦留寺建立説を「不審」としない姿勢と共通するものがある。

このように見てくると、やはり、延慶本燈台鬼説話と長門本燈台鬼説話とは、表現や設定に大きな違いがあるということになるだろう。また、『盛衰記』に関しては、表現上の著しい相違は見られない。そこで次に、これら三本に

見られる燈台鬼説話の文脈上の意味とその役割について考えてみたい。

三 延慶本の燈台鬼説話

延慶本における燈台鬼説話についてはすでに山下宏明氏が、成経が父成親に会うことが出来なかった本話に対してこの例話は、弼宰相は父大臣に会うことが出来ており、そこには「ねじれ」があるとされている⁽³³⁾。つまり、本話と例話の結末が一致していないということだが、確かに山下氏の述べられる通り、延慶本における結末は異なっている。そこで四本の結末を整理すると次表のようになる。

宝物集	延慶本	長門本・盛衰記
弼宰相は輕大臣を訪ねた。	本話 成経は成親を訪ねていない。 例話 弼宰相は迦留大臣を訪ねた。	本話 有王は俊寛を訪ねた。 例話 弼宰相は迦留(輕)大臣を

弼宰相は軽大臣を連れ戻す。		弼宰相は遡留大臣を連れ戻す。	本話 成経は成親を連れ戻していない。
弼宰相は遡留(軽)大臣を連れ戻していない。	本話 有王は俊寛を連れ戻していない。		例話 弼宰相は遡留(軽)大臣を連れ戻していない。

延慶本では本話と例話が一致していないのに対して長門本・『盛衰記』では、有王が俊寛を訪れたという点で例話と一致し、有王は俊寛を連れ戻していないという点でもまた一致している。この「連れ戻した」という点は、延慶本が「遂ニ御門ニ申請テ帰朝シテ」としているのを指すが、長門本、『盛衰記』はこれを記さず、出会った二人のその後については言及していないので、本話に沿う形となつてゐる。そして長門本では、「宰相、是を見てこそ、我父、かるの大臣とは、しり給しか。俊寛か主従こそ、かの弼宰相の、

父子にちかはさりける物をや」としてこの俊寛主従こそがまさに弼宰相父子と同じであるとし、その共通点を述べている。延慶本のこの部分は「是ハ其詮モナケレドモ」として、訪れることができなかった、連れ戻すことが出来なかったという点を指摘し、ただ父親のことをのみ思つて泣き暮らした、としている。長門本のように本話と例話を積極的に一致させようとする姿勢は延慶本には無く、『宝物集』の意図に沿う形となつてゐる。『盛衰記』ではその正体が判明したことを記すのみである。そこで、この相違を考えるために延慶本の次のような例話を挙げたい。

今度ノ御産ニサマノ事共有ケル中ニ、目出カリケル事ハ、太上法皇ノ御加持、有ガタカリケル御事也。昔シ染殿ノ后ト申シハ、清和ノ国母ニテ、一天下ヲナビカシ給ヘリシ程ニ、紺青鬼ト云御物ノケニ被取籠テ、世中ノ人ニモサガナクイワレサセ給事侍ケリ。智証大師ノ御時ニテオワシマシケレバ、様々ニ加持セラレケレドモ、不叶シテヤミ給ニケルニ、今ノ法皇ノ御験者ニ御物ノ氣ノ譏ノ嫌事、返々目出クゾ覚ヘシ。これは第二本八「中宮御産有事付諸僧加持事」の例話で、中宮徳子の御産の際に現れた物怪を後白河院の加持で追い

払った後に続くものである。ここでは清和天皇の国母染殿後に、紺青鬼という物怪が取り憑いた際、智証大師が様々な加持をしたが効き目が無かったとし、それに比べて今の後白河院の加持は素晴らしいものである、としている。これは本話とは反対の結末の例話だが、ここであえて反対の例話を示すことで、今の後白河院の加持の素晴らしさを一層高めることに成功している。もう一つ例を挙げる。

昔景行天皇ノ第二御子、小雄皇子、異国ヲ平ゲニ下リ給ケルニコソ、ヲトメノ形ヲカリテ、賊ノ三河上ノ武智ヲバ滅シ給タリケレ。ナドヤ是ハ、昔今コソ異ナラメ、我御身ヲ滅シ給ケム。先世之御宿業ヲ奉ル察シコソ哀ナレ。

これは第二中十一「高倉宮都ヲ落坐事」で、挙兵したことが発覚した以仁王が邸宅から女装して脱出した後に配されている例話である。ここでは女装をして河上武智を討つことに成功した小雄皇子を例として挙げ、「ナドヤ是ハ」以下、小雄皇子と同様に女装したが、失敗した以仁王を「哀ナレ」としている。ここでも本話とは結末の異なる例話を挙げることで、クーデターに失敗した以仁王の哀れさを一層高めている。

このように、本話とは反対の例話を挙げることで、本話をさらに強調し、その性質を高めるようになっていく。延慶本の燈台鬼説話もこれらと同じ方法だと考えられる。

つまり、弼宰相が迦留大臣を訪れ、そして共に帰国したという成功の例話を示すことで、父成親を訪れることも、そして連れ戻すことも出来なかった成経の「悲しみ」が一層高まっているのである。長門本・『盛衰記』は、俊寛説話の例話とし、「遠くの流人を訪ねあて」という共通点を示し、説話に改作を加えることで本話に沿うような例話となっている。しかしそうであるなら、有王が最後に都へ帰ったとする本話に沿うように弼宰相も日本へ帰さなければならぬはずだが、ここではそうはなっていない。これらに対して延慶本は、本話とは結末の異なる説話を例話とするという、逆接的な手法を取っているということになるのである。

おわりに

前章で述べたように、燈台鬼説話のモチーフは「父子の孝養」であるから、ここでは「父子の物語」が語られなく

てはならない。しかし、長門本や『盛衰記』ではこの説話に積極的な改作を加え、俊寛有王主従の説話としている。長門本・『盛衰記』ではそのモチーフが変えられたと理解すべきであろう。延慶本は『宝物集』を引き写しにしているように見えながら、本話と例話のモチーフを通底させているのである。

そして、前段の廿四「丹波少将福原へ被召下事」の最後に、妹尾太郎兼康の思惑を知って以後、何も聞かなくなつた成経に対して「哀也シ事也」とし、「迦留大臣之事」の最後でもう一度、「親子ノ中ノ哀サハ」とする。「哀」という感情で延慶本は、成経物語と燈台鬼説話を繋いでいるのである。

注

- (1) 高橋俊夫「延慶本平家物語説話攷―宝物集との関係をめぐって(上)―」(『國學院雜誌』第七十六卷第十一号 昭和五十年)
- (2) 水原一『延慶本平家物語論考』(加藤中道館 昭和五四年 三二九頁―三三〇頁)
- (3) 山下宏明「『平家物語』の説話受容」(『文学』四九号 岩波書店 昭和五十七年)

延慶本平家物語における「燈台鬼説話」

- (4) 今井正之助「平家物語と宝物集―四部合戦状本・延慶本を中心に―」(『長崎大学教育学部人文科学研究報告』三十四 昭和六十年)
- (5) 山下哲郎「輕大臣小攷―『宝物集』を中心とした燈台鬼説話の考察―」(『明治大学日本文学』第十五号 昭和六十二年)
- (6) 高橋貞一『平家物語延慶本長門本新考』(和泉書院 平成五年 一〇八頁)
- (7) 河原木有二「燈台鬼説話をめぐって」(『語学と文学』第二 五号 九州女子大学国語国文学会編 平成七年)
- (8) 山田昭全「平家物語「卒塔婆流」の成立―延慶本作者が宝物集に依つて創作した―」(『文学・語学』第百六十二号 平成十一年)
- (9) 使用した平家物語諸本のテキストは次の通りである。延慶本(北原保雄・小川栄一編 勉誠出版 平成十一年五月)、長門本(麻原美子・名波弘彰編 勉誠社 平成十年二月)、『源平盛衰記』(松尾葦江他校注 中世の文学 三弥井書店 平成五年五月)
- (10) 古辞書叢刊刊行会編『和歌色葉』(雄松堂書店 昭和四九年)
- (11) 片桐洋一編『毘沙門堂本古今集注』(八木書店 平成十年十月)
- (12) 秋永一枝・田辺佳代編『古今集延五記』(笠間書院 昭和五三年八月)
- (13) 『宝物集 閑居友 比良山古人靈託』小泉弘他校注(新日本古典文学大系四〇 平成五年)

- (14) 『五常内義抄』下 太田次男編 古典文庫(昭和五四年)
 (15) 前掲論文(5)。氏は『白氏文集』の「矮土」が日本に馴染みのない語であるとして、『五常内義抄』がそれを翻案するに当たって悲劇である「燈台鬼」を選んだところに、『宝物集』との潜在的な関連を指摘しておられる。
- (16) 『帝王編年記』卷九斉明天皇六年 国史大系第十二卷(吉川弘文館 昭和四十年十二月)
 (17) 冷泉家時雨亭叢書 第四八卷『簾中抄・中世事典・年代記』(朝日新聞社 二〇〇〇年六月) 所収
 (18) 續羣書類従 第二十九輯下雜部(昭和三四年)
 (19) 大日本史料 第四編之十三「龍燈鬼像胎内銘」八八〇頁、八八一頁(大正二年一二月)
 (20) 『奈良六大寺大観』第八卷 興福寺二 五二頁(岩波書店 昭和四五年)
 (21) 使用する『宝物集』諸本は次の通りである。一卷本(統群書類従 三二下)、二巻本(築瀬一雄編『碧冲洞叢書』第一卷第三輯『校合二巻本宝物集』臨川書店 平成七年四月)、三巻本(山田昭全・大場朗・森晴彦編『宝物集』おうふう平成七年四月)、吉田本(吉田幸一・小泉弘校『寶物集』古典文庫 昭和四四年一月)、吉川本(小泉弘校注『宝物集』閑居友 比良山古人靈託『新日本古典文学大系四〇 平成五年一月』、光長寺本(小泉弘編『中世古写本 宝物集』古典文庫 昭和四六年一月)、久遠寺本(瓜生等勝編 未刊 国文資料第四期 昭和四八年一〇月)。なお、二巻本は江戸
- (22) 期書写のものが、築瀬氏が解説において、一卷本とは兄弟関係であり、「宝物集の原形を考へるについて、二巻本は一卷本におとらぬ資料価値を持つものである。」とされているので、使用する。
 (23) 筆跡から本文と同筆であると考えられる。
 (24) 孝徳天皇と皇極天皇は非常に近い代であるので、錯綜したのだと考えられる。
 燈台鬼説話は、時代が下るにつれ、変容した姿を見せてくる。室町末期の唱導説話集『因縁抄』は、「推古天皇ノ時、迦留大臣ト云大臣、有之。而二、推古天皇、彼大臣ヲ渡唐サセテ、善時ヲ習ハセントス。」(阿部泰郎偏『因縁抄』古典文庫)として、長門本のような高向説の流入が見られるが、さらに、囚われの身となっていた迦留大臣を助けるために、弼宰相が、「唐土一番ノ開基打」と開基勝負をするという設定が加わっている。これは、『江談抄』などにある、「吉備大臣入唐説話」との混交であると考えられるが、そうしたことについては既に、小林幸夫氏が「燈台鬼―連歌師と野馬台詩伝承―」(『説話・伝承学』六 説話伝承学会編 平成十年四月)で、①ストーリーに類似点が多い②『下学集』に燈台鬼と吉備大臣が並んで記されている、という点を挙げて指摘しておられる。さらに、同じく唱導書である『金玉要集』(伊藤正義監修『磯馴帖』村雨篇 和泉書院 平成十四年)にも燈台鬼説話が、
 日本輕大臣ト申シ、行遣唐使、不過不帰。人伝云、作

灯台鬼^ト。其子弼宰相、密^ニ聞^ス之^ヲ。祈念^ス。我早成唐使^ト、
渡唐^ニ見父^ヲ。為^ニ孝養^ノ故^ニ、仏神哀之^ト。已^ニ当遣唐使^ト、
日本^ノ宝^ヲ、大國^ニ渡^シ物^ノ数^ス、

但馬紙 淡路墨 上総鞆 武蔵鐙 能登谷(釜)

河内鍋 長門牛 陸奥馬 備後鉄 備中刀 越前綿

美作八丈 石見細布

此等ヲ唐土ノ国王ニ奉リキ。

とある。傍線部にあるように、献上品を持参するという設定が加わっている。このように、燈台鬼説話は、様々な展開を見せており、長門本もそうしたものの一つであると考えられる。

(25) 『日本書紀』卷廿九「天武天皇朱鳥元年丙戌」(国史大系 第一卷下 吉川弘文館 昭和四二年)

(26) 卷第五 岡見正雄・赤松俊秀校注(日本古典文学大系八六 昭和四二年)

(27) 卷三十九(名著刊行会 昭和四六年二月)

(28) 寿永二年十一月二十一日条(新訂増補國史大系十一 吉川弘文館 昭和四十年八月)

(29) 寿永二年十一月二十一日条(増補史料大成 臨川書店 昭和四十年九月)

(30) 永積安明・島田勇雄校注 一九七頁〜一九八頁(日本古典文学大系三十一 昭和三六年)

(31) 『古今著聞集』一六七「伊通公中納言に任ぜられず恨みに堪へずして辭職の事」

(32) 伊通の人物像については、既に、久保田淳氏(『新古今歌人

延慶本平家物語における「燈台鬼説話」

の研究』昭和四八年)、村上學氏(『説話論集』第二集 平成四年)、田仲洋巳氏(『岡大國文論稿』第二四号 平成八年)の詳細な論がある。

(33) 前掲論文⁽³⁾

〔付記〕本稿は、日本文学協会第二三回大会(平成十五年七月六日・於龍谷大学)における口頭発表をまとめたものです。席上、ご質問、ご指摘頂きました諸先生方に、厚く御礼申し上げます。

(本学大学院博士後期課程)